

杭
州
人
氏
之
書

8

6 5 4 3 2 1 0

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

60 50 40 30 20 10



あやういきの

卷之十

莊子外物篇婦姑
壠礎とよま似り
唐夫人姫と乳とふ
くらうごひ誰かひ
りづき本と

れありすむし人乃
人列々はよづる敵
の心をもつてどひよ
ゆふうくもゆされ定
論語より晏平仲善文
交々而敬之とれおほ
かやうる。よことあり
ぐ延年らじや佛茶
色慚愧衆善之衣服
どうり傳ハシゴクゆ
要行をせぬ。愧ハ他人
をもうちゆきを

あやういきの
あやういきのむ、又もとわ
く、やういきのよめのよみけよ
ねく。さううねつけねき。
人乃すと 徒者(辯)片輪
ちやがぬもとくられてせよあわりど
ば(那壁)うきく實(ふみ)がれど
うくれきすうきく人乃す
人乃く(本)あらじ
あくよう、あくとやがはゆす
ねく(本)實(ふみ)がれど
集(本)これ めだまきど
つすりんすすけはなまよと
風(本)うじい

スホモナホモホセシテ
ミハヨリテアシムトモア
ドレドナリトヨリムアキ
ミカシマムトモアキ
ミトヨリテアキルサセ
ヒガタリテアキルサセ
ミカシマムトモアキ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス
詩をすゞ誦ス國シテアキ
カタシマムトモアキ
色ヤホシナ人モトモトモアキ
カタシマムトモアキ
色アキシマムトモアキ

スホモナホモホセシテ
ミハヨリテアシムトモア
ドレドナリトヨリムアキ
ミカシマムトモアキ
ミトヨリテアキルサセ
ヒガタリテアキルサセ
ミカシマムトモアキ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス
詩をすゞ誦ス國シテアキ
カタシマムトモアキ
色ヤホシナ人モトモトモアキ
カタシマムトモアキ
色アキシマムトモアキ

スホモナホモホセシテ
ミハヨリテアシムトモア
ドレドナリトヨリムアキ
ミカシマムトモアキ
ミトヨリテアキルサセ
ヒガタリテアキルサセ
ミカシマムトモアキ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス
詩をすゞ誦ス國シテアキ
カタシマムトモアキ
色ヤホシナ人モトモトモアキ
カタシマムトモアキ
色アキシマムトモアキ

サモナホモホセシテ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス

詩をすゞ誦ス國シテアキ

カタシマムトモアキ

色ヤホシナ人モトモトモアキ

カタシマムトモアキ

スホモナホモホセシテ
ミハヨリテアシムトモア
ドレドナリトヨリムアキ
ミカシマムトモアキ
ミトヨリテアキルサセ
ヒガタリテアキルサセ
ミカシマムトモアキ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス
詩をすゞ誦ス國シテアキ
カタシマムトモアキ
色ヤホシナ人モトモトモアキ
カタシマムトモアキ
色アキシマムトモアキ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス

詩をすゞ誦ス國シテアキ

カタシマムトモアキ

スホモナホモホセシテ
ミハヨリテアシムトモア
ドレドナリトヨリムアキ
ミカシマムトモアキ
ミトヨリテアキルサセ
ヒガタリテアキルサセ
ミカシマムトモアキ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス
詩をすゞ誦ス國シテアキ
カタシマムトモアキ
色ヤホシナ人モトモトモアキ
カタシマムトモアキ
色アキシマムトモアキ

モニノコニテ詩をすゞ誦ス

詩をすゞ誦ス國シテアキ

カタシマムトモアキ

と作らる船も多
せんいに病の人も
きてあふずでござ
うされがわざとく
やとどし
とどのうちねだり
宗祇寺本の別塾が廻は
あくへかかみと。土月酉
也。調ふハ午乃日也。内そ
あくと愚業江次第十番
寛平元年土月廿一日有
賀茂臨時祭事。右近侍
藤原時平為使。これ勤
めや。於て穿等參
もあよ葉あわせ極本
とて先試不まそ次り
調樂(アラシヤ)手人等
をとのへさせり。か
さりの友人等の是れ
主教(ハチヤ)大庭等と
はうちど。ゆえ江次牙(隣)
系の試ふ。上入御所
若(ハク)及(ハク)黒圭殿官人奉
焼火(ハカル)於庭中とわう。これ

「アラシヤ」
「音樂」

「イ共乃アレドモ」
「アシヤ」
「アラシヤ」

御羹(ウナギ)のわさびと
三合を小准へて煮し
目付(アラシヤ) 湯(アラシヤ)
ようひとつと細油(アラシヤ)束
等(アラシヤ)直(アラシヤ)衣(アラシヤ)
ハ置(アラシヤ)乃(アラシヤ)ヒト
殿上人(アラシヤ)所(アラシヤ)とも
中將(アラシヤ)がね(アラシヤ)石(アラシヤ)をす
れ置(アラシヤ)木(アラシヤ)の陰(アラシヤ)
とあ(アラシヤ)彼(アラシヤ)若(アラシヤ)の陰(アラシヤ)
ふ生(アラシヤ)るるるるを(アラシヤ)あ
う(アラシヤ)ぬ(アラシヤ)大鎧(アラシヤ)甲(アラシヤ)葉(アラシヤ)
院(アラシヤ)の(アラシヤ)時(アラシヤ)際(アラシヤ)の(アラシヤ)あ(アラシヤ)密(アラシヤ)
ぬ(アラシヤ)里(アラシヤ)上(アラシヤ)を(アラシヤ)う(アラシヤ)た
物(アラシヤ)に(アラシヤ)びしに(アラシヤ)か(アラシヤ)記(アラシヤ)
す(アラシヤ)が(アラシヤ)き(アラシヤ)を(アラシヤ)す
わ(アラシヤ)と(アラシヤ)て(アラシヤ)は(アラシヤ)い(アラシヤ)乃(アラシヤ)や(アラシヤ)
ん(アラシヤ)が(アラシヤ)と(アラシヤ)例(アラシヤ)の(アラシヤ)か(アラシヤ)り(アラシヤ)よ(アラシヤ)に(アラシヤ)ひ(アラシヤ)し(アラシヤ)と
べ(アラシヤ)。え(アラシヤ)な(アラシヤ)ハ(アラシヤ)緑(アラシヤ)墨(アラシヤ)あ(アラシヤ)わ(アラシヤ)く
と(アラシヤ)く(アラシヤ)と(アラシヤ)か(アラシヤ)と(アラシヤ)う(アラシヤ)と(アラシヤ)
と(アラシヤ)う(アラシヤ)と(アラシヤ)う(アラシヤ)

中(アラシヤ)お(アラシヤ)定(アラシヤ)お(アラシヤ)う(アラシヤ)と
(アラシヤ)え(アラシヤ)別(アラシヤ)居(アラシヤ)、
屋(アラシヤ)甚(アラシヤ)の(アラシヤ)宿(アラシヤ)、
りと(アラシヤ)や(アラシヤ)て(アラシヤ)う(アラシヤ)

もやまとあくと
化生れゆあくと
きてゆく。南の鬼
の眞信公をめぐらし
の鬼院の眞れ事の
度量とぞうれり
古今著聞第十七代
乃都小ねばざいタレ
殿上人のはううれり
上車アと殿上人と下車
乃陽也も差異あらず
や。あるも殿上人の緊
ぎまほきとせびやう
えどくとあり

かがたきこととき
上車ア前詞をたとき
とひ。殿上人のをとて
すくや。とくほり乃
殿上人と
かくとびまれ
まを底きげんをも
を女房の背ゆきゆき
にとされとすらよがううがう
ハモアリとて。ナムアドモア
ハモアリ。中まの風をまじて
乃ひよに泣きらやうとも。ヤムヒテ
女房もじゆふ。こはな乃ミイドリ。左赤
門^{建春門}入ま上車部乃門^{モモ門}も殿上人
乃ミシドウさればやわらきことゆかとゆは
けて。あよくじよあれど。右赤
門^{建春門}入ま上車部乃門^{モモ門}も殿上人
ノモトシマキアリ。さればやわらきこと
とりすす。アカスアドリ。ハモアリ。セ
アドスアホリ。アドスアモアリ。らればこう
那どりとが。ありうすれ。う
はまがちれ女房の月アツ月アツ
きらわわらきの度^{メタ}ゆゆゆりてうりくを

あがーと多乃林

左詩と朗詠するしる
何茶院^{アシ}夏荷用避
暑^ヒとみを涼英明
池冷^{アシ}水無三伏夏松高
風有一声秋^{アシ}とぞもと
ほの一毛の秋^{アシ}とぞもと
おもとみか一種もと
までもうう。上車の
葦草^{アシ}と退か^{アシ}。又
内せ^{アシ}とぞとぞとぞとぞ
をうるワ用^{アシ}とぞとぞ
底^{アシ}とぞとぞとぞとぞとぞ

きらわわらきの度^{メタ}ゆゆゆりてうりくを
あよくじよが。アモア
やうくらげまへ。左赤^{アシ}門^{建春門}入ま
てうりくとくゆやわれもととくの付
くーと多乃林とよんぎくととくとぞ
乃林とぞ。アモア
クーと多乃林とよんぎくととくとぞとぞ
ペホドロとてぬきどり月^{アシ}入^{アシ}女房^{アシ}の月アツ月アツ
あくとぞ。アモア
モ殿上人乃門^{モモ門}入ま上車部^{アシ}も殿上人
あくとぞ。アモア
けらきとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

けらきとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

事ありて。上は唐
の書物へ延喜式圖書す
あり。江波第小行矣
ちどり乃臣屏風とり
わす。唐佛名のやあ
左えは近々さんわで
してかをまつせむと
雪圖抄佛名のやま云
以地獄寔御屏風七
恵五七タ之間有綱鎮
子等或畫云若無件
御屏風之時用漢書
御屏風。字書在焉
第ニもくれ候の事だ
士方のナリ。もうぬ
きび居佛名として地獄
終乃臣屏風なども出
てちらしくあ
ひくらまくやう
望望がまゆ居水止算也
危。王人忘歸客不収尋
声。間向彈者誰。瑟也。

事ありて。上は唐
の書物へ延喜式圖書す
あり。江波第小行矣
ちどり乃臣屏風とり
わす。唐佛名のやあ
左えは近々さんわで
してかをまつせむと
雪圖抄佛名のやま云
以地獄寔御屏風七
恵五七タ之間有綱鎮
子等或畫云若無件
御屏風之時用漢書
御屏風。字書在焉
第ニもくれ候の事だ
士方のナリ。もうぬ
きび居佛名として地獄
終乃臣屏風なども出
てちらしくあ
ひくらまくやう
望望がまゆ居水止算也
危。王人忘歸客不収尋
声。間向彈者誰。瑟也。
さうしておはけ
本ノへゆきてくいゆ
えどもおはぢ下
あるおれんをさゆる
くいゆるこく
傀儡乃臣車。や。木のうとありてあ
陣月ノ一筆のふゆる。五月あづさすれ陣月ノ大車の受領。成る
あよし大車。上國中まで
あくいゆる國多内。あ
医佛内。あと。そど
例内。ねく。三方の
聞佛。みどりをとく明
めぐらす。寺中移
寺合。往云佛久に十九日よ
アハ一日。あく。こゝ自守
三世の法佛の店名と唱
て六根比罪を懲悔も
侍。寶龜五年十二

せうとこうさけ

足取されとくされ
のゆきし酒し夕前の事
ア・お直の事とくも

地をとあ。アの事の
まとうこうとくはる

タキ

らす。うちれ人アハラハド。せうと
らす。うちれ人アハラハド。せうと

こまきとのまみひくふまくまくへと
調をくまくつかよ

さうへわすとくわせ

よスばのゆ白きとき
えれまほりと

れりとくわせ

彼まちのわる上りとつ

けとくわせ

みのゆ
こまくまくせされとあもあす。とどくよ
藻中将のばうせうとまきとくとくし首尾
くわせとくわせするうとのゆし

す。口のゆせうとれかわすゆ
か。これうとくわせくわせくわせ

あ。こくうくス、れくみくわせす、
あ。とりじわうせ。わろきく車りひく、
みのせぬはうとくわせくわせくわせ

す。これうとくわせくわせくわせ

うくゆきよひよハヤヒヤ。づ
さりうか將りはくえくわ
あ。もゆよ。あんとづ。け小あ
な将居中将とくわせくわせくわせくわせ

せ。これうとくわせくわせくわせ

が将りはくえくわ
もゆよ。乃席進せんち
はの名參とくわ

だく。近きとくわ

職原抄云

少將相當正五位下

五位殿上人中馬譜身

公達者

公達者

あとくわれ
居がと居されと
ぐく國行とあると
あると
あわせたんと
まのりのふくと
う

うくゆきよひよハヤヒヤ。づ
さりうか將りはくえくわ
あ。もゆよ。あんとづ。け小あ
な将居中将とくわせくわせくわせくわせ
せ。これうとくわせくわせくわせ

あそばすのゆのゆせ
我あらうやがむだむし
タラまのわりわきと
せぐとうときもては
けたをねりとめをそ
神さくまくじるのあ
あふみ中將袖を教へよ
てほがとみかせり
とぬうひしん帳て
わくうちと厚てよる
独れが袖とよる。

けられねあまと
ほがえぬもせず
袖は、とめやくも
翠やのどひうじと
袖つぎは梅臺、^{さかちや}
とくひ殿のゆく袖とく
らげゆりぬよ。禁秘
おえ梅臺梅西白梅東紅
梅之由在清ナ納言記と
かくもほの奥もくち
車へふ定あれがする
くままで鞍馬寺

水鏡表延暦十六年藤原

伊勢人とす人貴船の明
神の仇をすてはく
をりて元亨釋書うへ
い体多入のすれどち是
はれの鞍馬をすすゆ
かれど日本紀よハ天武天
皇の御ることよりての
名とスレ。左あれ表也
こよいとれふれん、
鞍馬ちほのへ方すすれ
今れふか方圖あらて明
あらと。方とくどん
天一神うくの方にあらる
矣ハ云く。右ハモヤが
れ方へゆくをまうで明
明きてよくとく方方りぬ
ハゆく本

タラけと、中國自道隆
公ノ四夷一寧院の御画
殿、小京院の母代と、莫
石の浮れ系圖うり、
捨菴云御画殿の貞觀殿
の中りあり。上萬の房
を別

あさすくかくとめ
あさすくりりてくのよか
一づらのちう袖さくもど
のう。おもいあまりきまち
のう。乃二月二十五日。官
居官職^{左官職}おだ
もくしよ出ませり。往^{まか}まにまへ
梅はがすのうりあくわし。乃日乃中將乃
せううみてまのふのとくまくまくで
せううみてまのふのとくまくまくで
にゆく。よじはくまくまくで
居にゆく。よじはくまくまくで
すりよべきてゆうけりゆくまくまくで
梅臺^{まちや}はがすのとくまくまくで
このよきりひとばがぬよひくらへ

居ううみてまのふのとくまくまくで
定みのゆううとくまくまくで
行^ゆく。よじはくまくまくで
居^ゆく。よじはくまくまくで

居^ゆく。よじはくまくまくで

定

みのゆううとくまくまくで

定

みのゆううとくまくまくで

定

みのゆううとくまくまくで

あり。以ては便服及
内着の如腰服をも
とすより

トとす。あけ
たを腰腹半部
トハ腰子と枝子と
うそとし部とあ
あふやうすそと
をら車半部と
てあり。上の半部
をあすれは下部と
名す。

とす。あべく。ごめり。はり。かく。うす。あ
せ。めく。まゆ。まゆ。まゆ。まゆ。
指貫のうえ。まゆ。
まゆ。めく。まゆ。
まゆ。まゆ。まゆ。
まゆ。まゆ。まゆ。まゆ。
まゆ。まゆ。まゆ。まゆ。
まゆ。まゆ。まゆ。まゆ。
まゆ。まゆ。まゆ。まゆ。
まゆ。まゆ。まゆ。まゆ。

あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。
あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。

とすかうんへがうる
あよりそくばひな中将
のをやうある形うきさ
らひまほのくすり
うんとし
かくのくわうと出され
奥よりそくはほうの
形うきれふぶな中将
のやうそくやうくも
ぎます
あくとく
うかめの仲患り
大寝とうわうてそと
ひり人のみぞう
がう後花うじとあ
ひめう帝の一の内撃
をかうううべき宣
骨下アラシテスル
わへりひの童生と
仲患ハわんのせうわ

とすかうんへがうる
あよりそくばひな中将
のをやうある形うきさ
らひまほのくすり
うんとし
かくのくわうと出され
奥よりそくはほうの
形うきれふぶな中将
のやうそくやうくも
ぎます
あくとく
うかめの仲患り
大寝とうわうてそと
ひり人のみぞう
がう後花うじとあ
ひめう帝の一の内撃
をかうううべき宣
骨下アラシテスル
わへりひの童生と
仲患ハわんのせうわ

あやめうつわぐくゆゆ
すらりひきくとわくまく人也。まう
仲患がゆしきえまの
えく唐とくし巣
のうをやまとき
うやねたふて。ま
ゆをひそ天人の巣
大はげス奈の巣と
のくどあれど
あくまぐまととお
てわくまととお
をじきととお
んもじとされいと
しよへほりハシ出
かしトアリ。仲患
をわゆととお
ひくのうまくわし
あ小穂またとみ霧
のうへはゆと
あらまのあれ
毛俗情のぬまうまく
くゆくゆなまのく
てまくとくわのく
がくのねいあくと
西の巣あわて。眞やれ
苦ゆくゆをひくと
す唐乃驪山宮の巣
の御れわくとせん。文
集れ樂府ふあくと
ようて。同つゆ
良々集四樂府え驪山
高々驪山上有官朱樓
紫殿三四重。遲々春
月。玉枕暖。温泉溢。
媚。秋風。蟬鳴。宮樹紅。翠華不來歲
君在征。已五載。何不一
地。下田。乎其仲。西去都聞。今
上人。今のくりやもと

あやめうつわぐくゆゆ
すらりひきくとわくまく人也。まう
仲患がゆしきえまの
えく唐とくし巣
のうをやまとき
うやねたふて。ま
ゆをひそ天人の巣
大はげス奈の巣と
のくどあれど
あくまぐまととお
てわくまととお
をじきととお
んもじとされいと
しよへほりハシ出
かしトアリ。仲患
をわゆととお
ひくのうまくわし
あ小穂またとみ霧
のうへはゆと
あらまのあれ
毛俗情のぬまうまく
くゆくゆなまのく
てまくとくわのく
がくのねいあくと
西の巣あわて。眞やれ
苦ゆくゆをひくと
す唐乃驪山宮の巣
の御れわくとせん。文
集れ樂府ふあくと
ようて。同つゆ
良々集四樂府え驪山
高々驪山上有官朱樓
紫殿三四重。遲々春
月。玉枕暖。温泉溢。
媚。秋風。蟬鳴。宮樹紅。翠華不來歲
君在征。已五載。何不一
地。下田。乎其仲。西去都聞。今
上人。今のくりやもと

かひもあつうがくう
くそすとみがく
やうせうきくあふを
をかくすとく不用
くわく

かひもあつうがくう
くそすとみがく
やうせうきくあふを
をかくすとく不用
くわく

かひもあつうがくう
くそすとみがく
やうせうきくあふを
をかくすとく不用
くわく

あめりやうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
人ふとく名をすと
そそんぐすくへうす
れぐすくへうす
きくすくへうす
あやうくすくへうす
えあらすくすくへうす
ミカゲくすくへうす
けふうくすくへうす
はぬおほくすくへうす
きくすくへうす
れまたに死くすくへうす
こくくすくへうす
はくすくへうす
経房後政の役佛乃の
翌の日内院房代防禦
琴翁の役はくすくへうす
うべをくすくへうす
はくすくへうす

卷之四

卷之三

内
キニシム
タマリヒテ
レハモニシテルト則未少
翁を布ケ傳エリキ
タマリヒテ
キニシム

え 奥底を察せ
と詠さるが、さく
を下へ思ひのこ
マタリ
左毛乃久とて
則ちのえに本在事の
ゆきとけり。おふる事
の届と乃り。奥々巡爾
ノヨハれの督とゆぢ
あやかわくじて
いよきゆ 何は本
朝内令二月と。ま拂
拂絶どひま林内裏よ
て大般のみを清浄せ
らう。引常く
傍り立ちひそむ

おもひてあれば、かうじのうへ
うきひあつて、じとうへ
ちうねが、わざに
たゞまちけ、ばりや
とをねが、まくして
則えひ時をへれ、ほんと
されば、まくち成り、あ事の
よしを、ゆきか、とまわ
火ちく、さうとせ、あれ、あす
どかやうけらく、はんや、寧相
は後經の、あれ、累々とあると
乃へぬつて、ことりと
のあり、下せとせめ
にすびと

ハナリヒに

あふるよしはとまわ
をくわやまへまわ
れがえんやとまわ
きのむ

つもするああれす風の
まくすとせきとき
あはにああ布をうる
さふれり在所をうる

あくとあくと
くそりきつめがる

不候事すとしと
白きよやけまほ松迷

林よへ詠す陸奥

ち則え差へそし管

と同へられ里と

ひんをすりゆる

とくい役あくと

とぬかとくとくと

とくとくとくとくとく

寺にあてどとお供
院の事もあつてそも
いはかるもあひ
速せ併供の心もあひ
ゆき空すす風す
ゆきうかんと見と
ゆきうかんと見と
ゆきうかんと見と
舟よりつるをぬく
舟よりとみ

佛の座すふかくす
松老尼乃ち食のくら
くらは比丘比丘尼
優婆塞優婆夷を
四部八才をとて
此處をうちめがね
おひづれをまかへと
は節とめりひしと

まあくこくもとやりよへ
やうよすばへとをもとて
の種ふも食のあすき
とりびと氣ひきつろひて
佛の出来
ふりほりとげりけりわくと
トすをけりだぐもんかく
つぶさやりうるやじくと
尼房

くらくくす
くらくくす
や、屈乃字や、
乃字もとくらうて
くらう埋れて花ぐ
去くねざれ「屈」
うれづれ
がく食れちきぬ
佛代をとどハ接觸
をとくとされど

ちうき本うへと
ゆくらうゆく事文
ことどぐりゆくゆく
うれづれ

くらくくす
くらくくす
とくもくもくやりあるくもとて
ゆくくくく佛乃はくとと
くとくとと本の事つゆとくとく
尼房
りかくらうなば、こうとりやはれとくと
葉子、今このまゝどうあるのあらや
くとくのじう本、じうあくとくとく
とうりむとくとくせくまよばげよ中
とくありとくとくせくまよばげよ中
わき人ごうでゆきて、男やある。つづ
みすむひあどほくとくよかりきみ
うごとくとすればうひうひ

よもハれども
尼ワシヨミ

春暖四

三

あくすまじとひよもとてぬよトヨ
されとわんじもろすけとわんわ
れもどもト。されびすゑいとひからり
又モニ山乃峯なれぬをひらげる
トヨヒとめらをよそよす。道
きやくあれば、ひくとておく
とりゆきとおり。ねよけとせん
とみをあうせきひでひよだうあとく
ゆくのやうがと
ううやせん。宿
乃作せよ

あくすまじとひよもとてぬよトヨ
とみをあうせきひでひよだうあとく
ゆくのやうがと
ううやせん。宿
乃作せよ
とみねひしのとくせでくわやうよ
とむかせ事あれば、よりとれより
尼ワシヨミ

すまがきねすけり。ちうくとくよ
あがとくせられば、うたぐすてくか
うちけでよ。うがはくとくよ
みのちうへ。あじひくよやうひに
たくさくしてあるとくやうてひもの
すとほけ、わきねとくよすれ
あすとけゆくあれくじうちやりよ
えんあくやひよち近乃内はのまうり
れく。せれよのあんくとくひつてくま
とくやうあくよくはねよくくよくまく
被尼ワシヨミ

小糸とよ人。店舗
了れるき度。奥
みせちの附あひゆ
とけーもひく
あひそくとく
尼ワシヨミ

春暖四

三

ひうり見とくと
ゆくいあすと
よかくいと
も尼ハ宿官の侍得意
威氣に方々せきをすま
ともひ方でりとくと
作と内侍のがれ
てうる酒

んがすすみをすくはとくのあくと
ゆくとよもゆくと
あぐ笑よ
ものちみあるあゆめとくとくと
やつあまびゆきとくとくと
あどよよこれへとくとくと
あどよよひちがおとくとくと
あくとわしも
あくとわしも

ものちとくと
常陸乃とけみやと
乃尾りゆづけとま
をくとくとくとくと
くとくとくとくとくと
あーかぐじハされとよ。ねうちあきよ
ほくれあればきくね一門あくせーと
あーかぐじハされとよ。ねうちあきよ
ろくじて出ゆるをもやさひとくのぬ
いきあいとくとくとくとくとくとくと
久ちくとくとくとくとくとくとくと
きくすり十日月のり
年とくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくと女房どもあ

かかせよとくと
后えり作とくとくと
竹いとくとくとくと
古キ下めりとくとくと
引殺奈ハ後駕の洒
掃とほりとくとくと
捨遺とくとくとくと
乃とくとくとくとくと
まごちとくとくとくと
えはりとくとくとくと
鈴駕え藏の大丈亮
大進少進屬とくとくと
えはりとくとくとくと
玉方あう) 美人所
う(せん人あう) 大佐の
侍充(せん) 補之(ヒサシ) 稲原
村小(ムラコ) 桂(ケイ) 秘(ヒミ) おも
あ(アモ) 又禁祕(アモ) 雪(スヌ) 宮

万ノ累所衆作山
瀧口上萬三人所衆入
高庭奉行持柄振
それハ禁庭乃
伝管所宮山つもあ
らしくちぢ
かうりすとせん
雪出宿をとくと同
うだく福をとど
つるすすきと
にさくと背まが
牛を紹されハ勝りと
すしほ氏ゆ波りう
行とあらわす
う方せきねきと
うみでりか夜と
福をとて人退却で
のり袍をとる人の行
邊店とまは旅店と
玉とて作らばと
竹とヒトハ臣民也
りのこうとくと
ぐいが、がくわき

えはあやすはくらとてついと
えはあやすはくらとてついと
ばくとめくさきね二ゆくせえん
うあがゆを一けいとわよとわく
うづこくよ行くままでねうの
きぬあとまくはくまくまく
衣とて下る。これしつともとあうと
人のくまもすとて十餘日ばかりもん
うおもすあおれあおきとまく
うづこくらりとをわらかやわやせば
はまなま回を
いきととくせまびじ月八十日

まくまくとんとん
かをう白山はうと霧
並ぶれば金とるや
左今諸事とくられ
ハ残れす白山の名
雪ゆる力くる
自山明神ハ延喜式神名
帳ニ加賀國布郡自島
比咩神と云ふと奉澄法
印トハ十一面觀音とお
るがアリも本地とお
山乃御主とゆうむちの
ボアリシテヒロウチの

これも忠隆の事也。御子の如く、おまかせだよ。
 お山は、せぬもんあるまい。
 売り裁あると、あらせたり。春宮に、
 のは、うつりとばくらせてたり。春宮の如く、
 お山の下へ云々事候。
 お山の下へ云々事候。
 江戸一寺院、済時以後、
 大畠一寺院、済時以後、
 法事納去。記有す。細
 きこと、これ下へ云々事候。
 春宮三寺院、冷泉院。
 第二回子。寛和二年
 七月十六日春宮より
 弘徽殿義子也。寺主翁
 道家圖、義子一寺院、
 弘徽殿舊兩院太政
 大臣久木公女
 京極殿石川玄蕃。
 檜菴京極殿土御門。
 南京極西南南北二所。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山は、せぬもんあるまい。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。

其南一町、被入道長家、
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。
 お山の如く、おまかせだよ。

人乃身も死ひれねば。雪乃山ノのりりり
づづいわまきて、いのものらよ。大近乃
内はアヤク、あんとりひやわされば、あく
ノもとソヒヤリ
ツモトカミ月見
花をひらのまきを
ひらゆみと
うき人立てまく、あ
ハセウ
モヒムのまく人立て
大近うきとモキモ
キシテ
はかまら乃月
勧物云長徳元年正
月一日卯酉陰

袖萬子アマミキ直衣ウラ
スモアサシナキ
あくまの。せれも、あくまのぬき
ぬれ袖アラヘ不。わをまき、えめねよ
はけ、とをとを。わあめじゆう
うハジグホドと。ハ秋院よりとります
はくも
うハジグホドと。ハ秋院よりとります
ぬや、いも、店は日度、うし。
ぬや、ごるうよ。じきりこれば、女屋、や、本屋
うハジグホドと。ハ秋院よりとります
よせて、ひとわわんまく、ゆういふと
りつて、あれど、ひりめに。とくとく
せりし。あ、どうもすとくの、ゆうと
れど。秋院より、ほえたりんよ。ばかり
ゆきりけ、ゆき、ぐんぢやに。がよ

傳乃長を御室あるべ
あくし御刀せよ
ふすく
わくさせり
そよんうくす
くりゆきとくふ
れあくす
秋院より選子内侍
也望天皇を安
紹運錄云号大秋院歴
五代也足軒也說云
選子を大秋院とす
秋院より後孫院
もと五代の御院とす
うとくとく
ほがひりあきくあり
くまをうぐくとく
ひくとく

タニミミルアリ
はづりにさうまきゆ
さんとふりよおもて
あきあけやうやう
まくら
うち二所をうそた
や雄^テや秋^テ皆^テあ言^ハ
に本年ニ小書^ハ漢官
俊^テ正月^ハ月^ハ桃^ハ
枝^テ作^ハ剛^テ柳^テ枝^ハ厭^ハ思^ハ

山^テと^テも^テす^テう
ひなまむ^ハゆうり^ハく^ハ
ゆうと^テく^テい^テく^テと^テ
奉^ハよ^テう^テゆ^テ山^ハ
ひき^テ希^テの^テあ^テで
ゑれ^ハい^テ枝^ハと^テ
え^テい^テも^テや^テ枝^ハと^テ
枝^テと^テす^テり^テち^テむ

山^テと^テも^テす^テう
ひなまむ^ハゆうり^ハく^ハ
ゆうと^テく^テい^テく^テと^テ
奉^ハよ^テう^テゆ^テ山^ハ
ひき^テ希^テの^テあ^テで
ゑれ^ハい^テ枝^ハと^テ
え^テい^テも^テや^テ枝^ハと^テ
枝^テと^テす^テり^テち^テむ

す^テう^テあ^テハ梅^ハ高^ハ
あ^テえ^テゆ^ハ梅^のを^テ
そ^シ桃^ハ高^ハ従^ハト^テ
梅^ハ表^ラ裏^ラサ蘿芳^ハ三^テ
月^トり^テ角^ハと^テる^テ
雪^ハ山^ハ高^ハ小^テの^テ
ふ^シあ^シ山^ハ高^ハ觀音^ハ
り^シ首^ハ高^ハ從^ハ事^ハ
素^ハ高^ハ事^ハ事^ハ
き^ハ成^ハ高^ハ事^ハ
冬^ハ雪^ハ高^ハ事^ハ
モ^シト^シ高^ハ事^ハ
の^シと^シ高^ハ事^ハ
か^ハク^シ高^ハ事^ハ
か^ハク^シ高^ハ事^ハ

山^テと^テも^テす^テう
ひなまむ^ハゆうり^ハく^ハ
ゆうと^テく^テい^テく^テと^テ
奉^ハよ^テう^テゆ^テ山^ハ
ひき^テ希^テの^テあ^テで
ゑれ^ハい^テ枝^ハと^テ
え^テい^テも^テや^テ枝^ハと^テ
枝^テと^テす^テり^テち^テむ

人とおゆるす
やとく
まうのとすへど
い雪ひみたゆじ
わしゆく
二よりといよ
本ちふちくめう
は庭おきあわ
うく

主をもすすありあんまことやが
うすがよりく。人だけゆりう
つよのをうどりゆく。まわりせ
る。あへりあてくらんせさん
こやくもわしあれば。ほめれをも
びはうらへりようせ。こも
こひよのはねられりよひ。ひ
てゆくをえん乃とひくじよ
せでい雪乃山にまくわくわく
とくあくよみからむをこわせ
十ふれまでらへりせどくくま
アテ。も月アヒリ
マテ。も月アヒリ

うすの俸禄ゆくも
こだりてひくわく
うく

じいんぶのへば
臺盤所ハアタ
西シテ角をも
とりておもひ
せまく

あくせんとすやまく
ろくびさんあぐくひてはね
ど、さんあらへどとあくまく
トすまく。西シテ
おれやあめやどくわく
とくせれば。うちわくとく
とくふかうりゆくわく
のうりゆくとく。ほうのと
きうけんとく。ぬまの入内
あく。いわくせん。
まうのとすへど
七日まく。出でて出ぬ。
これうとうちゆくわく。おわく
ひどすゆく。あく。お
うく。あく。ひ
うく。あく。ひ

細旅シヤキやシヤキをシヤキ。
孟母モウモウ下女シヤウ、齋下シヤウのシヤウ。
シモシモ、シモシモハハシモが
トセトセ。トセトセのシモに
シモシモ、シモシモやシモをシモ。
シモシモ、シモシモハハシモ。
シモシモ、シモシモカカハハシモ。
シモシモ、シモシモ長目ロハサ青廁ミカハシ。

人ヒトとヒトも

七月乃ナニ後常休ノリタケのノリタケ。
七月七日七種シブシ乃ナニ七種シブシ。
七種シブシ乃ナニ七種シブシ。
七種シブシ乃ナニ七種シブシ。
七種シブシ乃ナニ七種シブシ。

人ヒトとヒトも

人ヒト乃ナニ常休ノリタケのノリタケ。
十四日シトモのシトモ人ヒト乃ナニ常休ノリタケのノリタケ。
人ヒト乃ナニ常休ノリタケのノリタケ。

人ヒトとヒトも

人ヒト乃ナニ常休ノリタケのノリタケ。

人ヒトとヒトも

ひきこもる。まやうせやりよくりとす
はらのをし トあはれ はらのをし
うとあきやうだりよすとゆくへ
ゆきほそはくせんとうめかとすんじ
つるをいとあひす はらのをし
みつるあくまのとばりありとす
ひふとれ、 云崩やうすとゆく
雪れ。ちのほすきとね
うんき。やうすとゆく
とひつめくら 云崩やうすとゆく
うひつめくら うひつめくら
をどめり。まやうせやん事とり
えんさればこもりぐとつるにまゆと
まくらうあるまでゆかうくをあらん
こがひつてぬをじるをすありぬ
とどめをうちくや続くといひにじく
禁中すがりす宿食のむくわい
うにわらがわせくりうりて。被雪ハリ
まである門やとのまうせらればれ

きみのたれまゆ
きみとくと
十四日までやは貴
くとあめとくと
ときけすまゆ

さく蜀とれど年乃うらはゆらを
でぶかあとと人けびてきしゆみの
タれまでやととくととまんぢい
まくとよまて。あまわら本とあんを
のり。まよ人乃やうがりてとわすとゆ
とあんをとくわゆとけ、せきせきと
ゆのくとくりゆき。まくとくのくと
せんとくせんとて二十月よりす
もと。お行はるをもあうととよま
くとあゆき。まくとくのくとく
のくとくとくとくのくとくとくとく

かしのまゆ
帽ふとや地のまゆ
いとまゆとくとくとく
あく

かわくのとくにん
ことひと年比の大作の

たぬのつるいぬのゆめり
のゆめりたぬのまへ人
をとせよ。いとまた
ゆのとくにんあつから
たぬの陣の南の葉に
のゆめりをとせよ
うすよきこゑ
一乗院とばほの宮
山をつくづくと
きこゑくわくと

かわくのとくにん
ことひと年比の大作の
たぬのつるいぬのゆめり
のゆめりたぬのまへ人
をとせよ。いとまた
ゆのとくにんあつから
たぬの陣の南の葉に
のゆめりをとせよ
うすよきこゑ
一乗院とばほの宮
山をつくづくと
きこゑくわくと

かわくのとくにん
ことひと年比の大作の
たぬのつるいぬのゆめり
のゆめりたぬのまへ人
をとせよ。いとまた
ゆのとくにんあつから
たぬの陣の南の葉に
のゆめりをとせよ
うすよきこゑ
一乗院とばほの宮
山をつくづくと
きこゑくわくと

かわくのとくにん
ことひと年比の大作の
たぬのつるいぬのゆめり
のゆめりたぬのまへ人
をとせよ。いとまた
ゆのとくにんあつから
たぬの陣の南の葉に
のゆめりをとせよ
うすよきこゑ
一乗院とばほの宮
山をつくづくと
きこゑくわくと

人と言ひたるを聞雪の
日暮よつひあるとみ

おき物いはりがまき

あざりととづるをこれよりあや
かしめす。まくわせみてに。

ほがゆき

ほがゆき

おもひあさくねがせらうす。ひであれ
うちもあさくねがせらうす。ひであれ
うらもあさくねがせらうす。ひであれ
うらもあさくねがせらうす。
正月一日の雪の事
いよしきせの中ぞり。のちうす
うちし雪をうわとせり。とされ
けふうとせり。とせり
あいゆふとせり。せせらうす。とせり。とせり
とせり。とせり。とせり。とせり。とせり
あんとうとわうりせりります
とせり。とせり。とせり。とせり。とせり

春曙村四次

